

随想

湾岸諸国を訪問して

～ blowing in the wind of Gulf ～

清水哲也*



最初に私を出迎えてくれたのは砂嵐だった。成田 22 時発の夜行便に乗り、ドバイを経由してクウェートに向かっていった。ドバイに早朝到着し、クウェート行の飛行機に乗り、出発間近というところで、砂嵐のためしばらく待機する旨の機内アナウンスがあった。台風や積雪のせいで遅れた経験はあったが、砂嵐が原因というのは初めてであり、飛行機の窓の外に広がる砂塵を見ながら、自分は今、中東に来ているんだ、ということを実感した。結局、2 時間ほど遅れて出発した。クウェートは、今でこそオンラインで事前にビザ取得の手続きができるようであるが、当時は空港でビザの発給を受ける必要があった。外務省のホームページには、査証取得カウンターで手数料を払えば取得できるようなことしか書かれていないが、実際には、クウェート通貨に両替して、自販機で証紙を購入し、査証取得カウンターで申請用紙をもらって必要事項を記入、証紙を貼付した後、パスポートと一緒に提出、整理券を受け取り、順番に呼び出されたあと、写真を撮られ、待っているとパスポートとともに A4 版のビザを受け取るというような手続きが必要である。私自身は同行してくれた商社の方の言われたとおりに手続きただけであるが、とにかく面倒でしかも案内が不十分で、たくさんの方がいて雑然としており、何も知らずに一人で来たら、入国するだけでも大変なことだと思った。このような手続きを経て、1 時間ほどかけてクウェートに入国、同行商社の方が、電話をかけまくって、完全に狂ってしまった訪問先とのスケジュールをなんとか調整してくれ、予定された 3 か所を無事訪問することができた。仕事を終えホテルに着いたのは夕方遅くで、夜行便で来たこともあり疲労困憊の状態であった。ここで、日本なら「お疲れさま」とか言いながらビールで乾杯となるが、クウェートは禁酒国家であり、生ぬるく味気ないビールテイスト飲料を飲みながら夕食をとり、中東での長い一日目が終了した。

2013 年から 14 年にかけて、中東地域、湾岸諸国と呼ばれる国々に出張する機会を得た。アラブ首長国連邦 (UAE) の国家構造すら知らない、全く無知といってよい状態から始めたが、延べ 70 日湾岸諸国に滞在する中で、仕事の面以外でも、日常とは異なる刺激的な経験をすることができた。

クウェートは、イラク進攻からの復興過程で、高層ビルが建ち、道路もまるでアメリカにいると錯覚するほど整備されていた。一方でイスラムの影響を強く受け、前述したようにアルコール飲料が全面的に禁止されており、街中で女性を見ることが少ない。見たとしてもアバヤ、ヒジャブ、ニカーブという体を隠す民族衣装を纏った女性が多く、日本とは街の雰囲気が異なる。

* 大同特殊鋼(株)執行役員マテリアルソリューション部長

クウェートでの仕事を終えた後、カタールのドーハを経由してドバイに移動した。ドバイは、空港の免税店でビールやワイン、日本酒等アルコール飲料を販売していて、民族衣装を纏わない女性も多く、自分にとっては当たり前の風景ではあったが、街自体が明るく感じられた。ドバイも、基本的にはアルコール飲料を街中で購入したり、飲食店で頼んだりすることはできないが、ホテルの中では提供しており、日本食を含めさまざまなレストランもあるため、飲食面に関しては、他の湾岸諸国に比べると不自由のない生活ができる。金融と流通そして観光を首長国の重要産業に位置付けているだけのことはあり、一定のグローバル化は進んできていることを実感する。一方、Wifi自体は問題なく作動するものの、何に反応しているのかわからないが、検索やニュースのネットサーフィンをしていると、突然閲覧禁止の画面が出る。どこかで監視されているようで少し緊張する。

イスラム国家は、文字通りイスラムを国家の基盤とし、政治や社会秩序はイスラムに基づくという政教一元が憲法にも明記されている。また、中東の国の多くは、君主と支配家系による統治が行われる王朝君主制であり、原油や天然ガスの権益で国家財政の多くが賄われている、いわゆるレンティア国家である。王朝君主制を維持するために、国民の自由を制約し、その代わりとして、潤沢な国家財政を活用することにより、国民の税金を無料にし、手厚い公的サービスを提供して国家体制を維持している。移民の割合が高く、支配層となる自国民が、被支配層となる移民を抑圧的に支配するという典型的なエスノクラシーをとることも体制の維持を図る上では重要な要素となっている。ただ、サウジアラビアは、他の国と比べ若い自国民が多いため、労働力の自国民化——サウタイゼーションを進めており、企業の自国民比率の義務化の他、他の湾岸諸国の自国民ではまずありえないような、タクシードライバーや製造業の現場スタッフなどの職業につくケースもみられる。

2回目の出張は、ラマダン前の6月末、サウジアラビアから始まった。ドバイ経由でサウジアラビアのダンマン空港に到着したのは午後10時過ぎ。入国審査場は一列に30人位待っている人がいた。2時間ぐらいかかるだろうか…。そんなことを思っていたが、これが甘かった。自国民と思わしき審査官の作業が遅いのか、査証不備など入国者の問題かはわからないが、一人当たり5分から10分、遅いと20分程度かかっている。結局、自分の順番が回ってきたのが午前3時、「お前は日本から来たのか、俺はレクサスに乗ってるよ、いい車だな。」なんて審査官が言っているうちに2分もかからずあっけなく通過したものの、結局、入国に5時間以上かかってしまった。とんでもない国に来てしまった。これがサウジアラビアの第一印象である。ちなみに、サウジアラビアには観光査証がなく、サウジアラビア在住者からの紹介状がないと査証が取れないし、そもそも、ある年齢以下の独身の外国人女性は査証を取得する権利もないらしい。ちょうど、訪問時に新聞にも掲載されて話題になったが、ドバイの若い男性が入国申請したら、美男子という理由で入国拒否されていた。定量的な入国基準がないようである。お祈りの時間になると、レストランを含めすべての店が休業状態になり店内に入れない、すでに入ってしまったときはその間サービスが停止された状態となる。レストランは女性とは入り口も別、働いている人を含め、男だけの店内で、アルコール飲料もなく、夕食もあつという間に終わってしまうという味気なさ。また、スーパーマーケットに行けば小さな男の子が平棚に並んだ冷凍食品の上で靴を履いたまま飛び跳ねている元気な姿を見たりした。一番驚いたのは、訪問中に突然、休日が変わってしまったことだ。サウジアラビアは、当時、木曜日と金曜日が休日であったが、多くのイスラム国家と同じ、金曜日と土曜日に休日に変更された。本当に突然であった。いつか変更するという噂はあったようだが、全くの周知期間なく、その週の月曜か火曜に、今週から休日変更とアナウンスされたようである。

中東の非日常的な経験の中で、随分いろいろなことを考えさせられた。今回紹介した生活面だけでなく、仕事面に関しても、日本では当たり前、常識と考えていたことが、覆されるようなことに少なからず遭遇し、困惑したり、驚愕したり、時には苛立つこともあった。逆に、常識というものが自分都合な思いであり、常識にとらわれると狭い見でしか物事を判断できなくなると考えたりもした。

常日頃、常識という言葉で片付けてしまえば、それ以上考える必要がなく楽であるため、どうしても多用してしまうが、時には常識をリセットして、自分を追い込んで深く考えてみる。そんなことも必要なんだろうかと、ペルシャ湾の風に吹かれながら、ビール片手に独りごちていた。

(November 5, 2016)